川崎市文化協会会長賞

夢の和菓子屋

東小倉小学校　６年生　饗場　汐理

物心がついたときから、私は心の中で、ある夢を抱えていました。それは、「和菓子屋」になることです。

もちろん、ただの和菓子屋ではありません。「美しい芸術を描ける」和菓子屋になりたいのです。

「美しいアートや芸術を描ける和菓子屋になりたい」これが私の将来の夢です。

・・「物心がついたときから」とは言いましたが、はじめから和菓子屋を志していたのではありません。むしろ和菓子は、「他所の国の知らないお菓子」というほど興味がなかったくらいです。

私は昔から、甘いものが大好きです。学校から帰ってお腹がすいたと思うや否や、アイスを食べていました。そんなこともあってか、わたしは気がつくとねん土でスイーツを作っていました。モンブランやケーキ、マカロンにドーナツ・・・。いろいろな種類を作っていました。

ここでんん？となった人もいるのではないでしょうか。そうです。このねん土スイーツのなかには、和菓子が入っていません。全て洋菓子なのです。甘いものが好きと言ってもなじみのある洋菓子に目がいってしまい、和菓子は完全なる部外者だったのです。それほど、わたしは和菓子に興味を向けていませんでした。

―しかし、この私の考えをくつがえす心機一転の出来事が起こったのです!!

二〇二五年十月、学校で「ふれあいまつり」というイベントがありました。このまつりでの昼食はチケット制で、自分が食べたいものを事前に注文しておいて当日に交かんする、というものでした。そこで私は、デザートにどら焼きを注文しました。いざ食べようと、そのどら焼きを一口ほおばると・・・。

なんと！あんこと生地が合わさり、言葉が出ないほどおいしい味が口いっぱいに広がったのです！

また、デザインもまあ流麗でとろけるあんこをしっかり生地で包みこんでいました。私は、このしゅん間初めて、和菓子の美味性や、流麗さに気付かされました。この時が、私が和菓子屋を志した発たんでもあったのです。

さらに、私の「和菓子屋になりたい」という夢を後おしするかのような出来事が起こりました。

私は、その美味しさにびっくりして、このどら焼きが製造されているところ

に行ってみることにしました。さあ入るぞとその店に入ったしゅん間、日本の芸術や文化が大好きな私はすぐに気付きました。そう、和菓子でとても素敵なアートが描けることに。この和菓子一品だけで、日本の伝統の芸術のすばらしさを伝えてくれることに。

私はこれに気付いたしゅん間、真っ先に心を射抜かれました。特に「練り切り」と呼ばれる上生菓子は格別で、美しい曲線と色味が合わさり、日本の伝統の芸術のすばらしさが何とも言えないほどに表現されています。

そんな和菓子との千載一遇の出会いがあり、今では本格的にねん土で和菓子を作っているほどです。ねん土で日々、上生菓子のような芸術的な和菓子を作る習熟をしています。今では、洋菓子ねん土より和菓子ねん土の数がかなり上回っています。

うまく曲線と色味が溶け合わさり、流麗なアートを描けたときは、私の心がゆさぶられないわけがありません。この時間こそが、和菓子の流麗さを伝えてくれるような、私だけの時間なのです。

将来、アートが描ける仕事はいくらでもあると思います。しかし、和菓子屋だけは違うと考えています。日本の文化だって、洋風化や近代化が進むにつれていつなくなるか分かりません。アートが描けて、「和」が一品だけで伝わるという仕事は、和菓子屋の他ないはずです。和菓子屋は、ただアートが描けるだけではない、日本文化を伝えるという、アート界でも白眉の存在なのです。そんな、美しいアートが描けて、日本の文化を伝えてくれる「和菓子」を、みなさんも食べて、見て、感じてみてはどうでしょうか。

日本文化の素晴らしさを。